

空白を埋めるべく、1月、「新地域政策」（会長は石油産業同盟会長メドヴェーデフ）という議会内会派が結成された。「新地域政策」は、設立宣言によれば、かつての市民同盟に代わって中央派の結集を図ることをめざしており、すでに65名の議員を傘下に置いたといわれる。これに加わった議員の顔ぶれは多彩である。骨格となるメンバーは、燃料＝エネルギー産業複合体を含む大企業の指導者たちであるが、共和国と自治体の利益代表のほか、ビジネスマン、軍人もこの会派に属しており、「新地域政策」は重要な社会集団を横断した会派であるといえる。

「新地域政策」が今後、どの程度統一した活動を続けることができるかは未知数であるが、政党システムの中央に、数のうえで自由民主党に匹敵する会派が誕生した意味は大きい。すなわち、自由民主党が議会内で主導的役割を果たす可能性は、相対的にではあれ、小さくなったといってよい。そしてもし、中央派と「改革派」との提携関係が成立するならば、エリツィンは議会にかなり強固な足場をもつことができよう。そもそも、連邦議会は新憲法によって権限を大きく削減されており、議会が大統領統治の障害となる可能性はこれまでよりも小さくなった。新たに選出された議会が国民の利益統合という機能を積極的に果たすことは期待しにくいにせよ、少なくとも、中央派の会派の成立によって、大統領および大統領内閣の統治にとって議会が障害となる可能性はさらに小さくなると予想してよい。

他方、連邦－共和国関係に関しては、エリツィン政権にとってジリノフスキーの台頭は

かえって好都合な結果をもたらすとも考えられる。というのは、たとえばカルムィキア大統領イリュムジノフ、カレリア最高会議議長ステパーノフ、バシコルトスタン大統領ラヒモフ、ウラル州知事ロセリなど、地方主義を唱える地方の実力者は、同時に堅実なプラグマティストでもあり、帝政時代の行政区画の復活を唱えるジリノフスキーを「より大きな悪」として把える発想をもちうるからである。彼らにとってみれば、自由民主党の躍進によってエリツィンとの協力関係が必要かつ可能となったといえてよい。

この事情はエリツィン政権にとっても同様であろう。そもそも、エリツィン自身、強大な敵を「創出」ないし「設定」し、それとの対抗を通じて自己の支配力を強めていく投機的リーダーシップをとっており、ジリノフスキーの台頭によって、そうしたリーダーシップを発揮する十分な舞台環境が整ったともいうことができる。逆に、ジリノフスキーが登場しなかったとすれば、エリツィンは地方の分離主義というさらに扱いにくい敵を相手にしなければならなかったであろう。

エリツィンの期待を裏切ることとなった選挙の結果、エリツィン政権と地方指導者の協力関係締結の条件ができつつあるのは皮肉であるが、もし、ジリノフスキーを共通の敵とする両者の「休戦」が成立するならば（その見通しは大きいと思われる）、少なくとも連邦制をめぐる「国家」の危機は、さしあたり回避されるであろう。逆説的ながら、選挙はエリツィン政権に、社会秩序との関連で生じた「国家の危機」に専念できる時間的猶予を与えたと考えることができよう。

研究班報告 4 戦後東南アジア情勢と域外大国についての研究班

フランスはアジアをどう見たか

瓜生 洋一

1. 本年度研究の方向と現状

本年度における研究の中心は18世紀におけるフランス人の対アジア観であった。とく

に、モンテスキュー、ルソー、ディドロ、コンドルセなどの著作の中に現われたアジア像を検討してみた。また、18世紀に刊行された辞書類（アカデミー版百科事典など）のアジ

アに関する記述を系統的に検索してみた。この作業は、来年度からの研究所の共同プロジェクトである「21世紀の民族と国家」の基礎作業となる。この基礎作業の上に、19世紀、20世紀におけるフランスの対アジア観を位置付け、21世紀における民族と国家のありようを検討しようとするものである。

本年度の作業は、あくまでもコーパス（資料群）の解明にあつたため、十分な分析にいたっていない。ただ、この基礎作業の中から、いくつかの特徴が浮び上がってきた。第一には、18世紀フランスにおける対アジア観の形成の材料は、従来から指摘されており、ジェズイットたち、つまり反宗教改革派の宣教師たちが残した膨大な報告書である。さらに、旅行者たちが残した旅行記、あるいは、留学生（中国人の留学生がパリに来ていた）に聞き書きしたものなど、多種多様なソースをもっていた。第二に、これらの記述の基礎には、アジア＝専制支配体制と考え、批判的に見る見方がかなり見られたこと。第三に、アジア、なかんずく中国の体制を評価する見方も存在したこと。第四に、フランスを典型的なモデルとして、文化発展と文化比較の視点から、アジアに接近する視点も見られたこと（アジアに対してかなり批判的であることが多い）。

これらのコーパスを、ディスクール分析の手法で目下分析中である。この分析によって、18世紀フランスがアジアを見るまなざしの深層を見いだす手がかりが得られるであろう。現在の段階で、キーワードとして選んだものは、「野蛮」「文明」「秩序」などである。これらのキーワードを軸に、18世紀の思想家、辞書類のディスクールの構造を分析し、

思想家や辞書類の表面に見えない深層世界を引き出してみる。この構造こそ、19世紀、20世紀にいたるフランスのアジアを見るまなざしを決定づけていったものと考えられる。

これらの基礎作業の上に、18世紀フランスの知的世界とアジアとの関係を見出すことが可能となる。

2. 来年度の研究方向

来年度は、今年度の基礎作業の上に、19世紀・20世紀のフランスのアジアへのまなざしを研究する。19世紀に入ると、フランス社会が大衆化し、同時に帝国主義的膨張をとげる。19世紀後半には、アジアへの進出が本格化する。その際、フランスの民衆がアジア進出をどのようにして支持、さらには参加するようになるか、が重要な問題となる。19世紀・20世紀において、アジアは、フランスにとって、単なる異世界ではなく、自己の経験の中に入りこんでくる、あるいは自己を投影する世界となる。その際、自己にとって密接なものとする経路は重層的である。国家の側では、万国博、外交使節団の接受のパレード、教科書による教育などの経路がある。他方には、民衆の中の語られ、唱われ、想像されるアジア像がある。たとえば、さまざまなイマージュ（絵入り新聞、大衆絵入り読物、ポスター）、さまざまなディスクール（シャンソン、軍隊・旅行談）、イマジネーション（写真、映画）などを通じて国家と民衆の双方からアジア像をつくりだしていった。

来年度は、19・20世紀の「生きられたアジア」を抽出してみる。その際、ディスクール分析に加えて、イマージュの分析もおこなっていく予定である。

| | | |
|-------------------------|------|----|
| 目次 | | |
| はじめに | 田中 浩 | 2 |
| 研究班報告 | | |
| 1. 福祉国家の政治経済学的比較研究 | 田中 浩 | 3 |
| 2. オピニオン・ジャーナリズムの国際比較研究 | 和田 守 | 5 |
| 3. 「国家」の危機に直面するロシア | 内田健二 | 7 |
| 4. フランスはアジアをどう見たか | 瓜生洋一 | 11 |

ICPS ニュース・レター
第3号 1994年3月

編集・発行：国際比較政治研究所（大東文化大学）
〒175 東京都板橋区高島平1-9-1
TEL 03 (5399) 7341 ダイヤルイン
刷：杉田屋印刷株式会社